流れ星

景雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流れ星

【Ｎコード】
Ｎ８５７７Ｚ

【作者名】
景雪

【あらすじ】
リチャードはアメリカ西海岸で暮らす、９０を超えた老人。ある日、孫のマイクが、まだ父親のエドワードにも紹介していない日本人のフィアンセを連れて来る。マイクが真っ先に彼女を紹介しようとしたのは、リチャードがかつての戦争で、日本人と戦った経験を持っているからだった――

祖父と孫

「グランパ。紹介したい人がいるんだ」
孫のマイクは高い声が良く通る。リチャードはロッキングチェアーに深く腰を掛けながら、長年腕でこすられてすり減ったひじ掛けをゆっくりなでる。
「エドにはもう紹介してあるのか？」
父親、エドワードの名前を聞き、マイクはうつむいて何も言葉を発することができない。結婚相手を紹介するならまずはエドだろう。そう思ったがリチャードは言葉にしなかった。マイクが敢えて一番に自分のところに来たのは、何か理由があってのことだと思ったからだ。
「フィアンセか」
「……うん」
すぐに返事をしないのは、後ろめたい何かがあるのだろう。エドよりも先に私に紹介しようと思ったのもそのためだろうか。リチャードはロッキングチェアーを揺らしながら思った。
「連れて来い。いるんだろう？　玄関の外に」
「……うん」
マイクはゆっくり後ずさりすると、玄関の外に消えていった。玄関の戸が開いて一瞬、外の光が目をくらませ、リチャードは長く伸びた眉毛で瞳を閉ざすように眩さを防いだ。近所に住んでいるとはいえ、早起きが苦手なマイクが午前中に訪ねて来ることは珍しい。リチャードは陽がほとんど入り込まない部屋の、分厚い暗がりにぼんやりと視線を合わせていた。そうこうしていると再び戸が開き、光がすっと差し込み、光の帯は段々と太くなっていった。部屋にこもっていた埃が舞い、それが照らされ細かい粒となって漂った。
「グランパ。ミス・ヤマダだ」
「はじめまして。キョウコ・ヤマダです」

リチャードは皺の深く刻まれた瞼をほとんど横一線に閉じ、突然飛び込んできた外界の明かりに視野を奪われてしまったが、「ヤマダ」というファミリーネームと、訛りの強い英語はしっかりと聞き取ることができた。

「グランパ。彼女は日本人だ。だからグランパに最初に紹介したかったんだ」

緊張している時、マイクは高い声が一層高くなる。リチャードはまだぼんやりとしか見えない視界に二人の人影を捉え、眼球を包み込むように三回強く瞬きをした。

「グランパが戦争で日本人と殺し合ったことは知ってる。でももう昔とは違うんだ。彼女には何の罪もない」

やっと焦点が定まったリチャードの瞳に、細身で髪の長い東洋人の女が映った。自分の居場所を探せずにいるのか、いつになく饒舌なマイクとは対照的に、彼女はうつむいてじっと黙っている。

「彼女は、ロマリンダ大学の同級生なんだ。グランパの後輩だよ」

そこまで聞いて、リチャードはおもむろに立ち上がった。口を開こうとしないリチャードが日本人のフィアンセに怒っているものと思い、マイクは慌てて次から次に様々な言葉をかけた。けれど祖父は黙ったままで、二人の姿が見えないのかまっすぐに家の外に向かった。ミス・ヤマダは高齢の割に大柄なリチャードを、後ずさりして大げさによけた。

「グランパ。聞いてくれよ」

マイクを右の掌で制し、リチャードは言った。

「マイク。ミス・ヤマダ。時間はあるか？　ちょっと行きたいところがある」

「え？」

「時間がかかるぞ。いいか？」

「うん……夏休みだから時間はあるよ」

マイクは短く返事をし、ミス・ヤマダも遠慮がちに頭を縦に振った。

リチャードは同じように口を開けたまま彼を見つめる二人を尻目に、九十を過ぎても衰えない足取りで海岸に向けて歩く。真夏の西海岸は雲が多いが、切れ目からは薄く気持ちの良い青が覗いて好天を告げていた。

「グランパ。どこに行くんだい？」

「後で話す。とりあえず船に乗れ」

「え。クルーザーで行くのかい？」

「船に乗られるんですか？」

ミス・ヤマダの問いかけにリチャードは答えない。代わりにマイクが答えてくれることが良く分かっているからだ。

「グランパは若い頃からずっと船に乗っているんだ。世界一周もしたことがあるんだよ」

「すごい」

「今じゃ年寄りの道楽だ。食料と飲み物を積もう」

最初からそう決まっていたかのように、三人は分担して準備を進め、まだ太陽がてっぺんまで昇る前に西海岸を発った。

海は濃く、緑と青を凝縮していた。徐々に離れていく西海岸の街並みは、山肌のように密集した建物の所々に高いビルが突き出て見えた。

「どこに行くの？　ハワイ？」

「焦るな。長い船旅になる」

操縦席でハンドルを繰るリチャードの斜め後ろにマイクが立ち、すぐ後ろの席にミス・ヤマダが腰をかけた。リチャードの操縦は的確で、六十年培った経験は皺の一本一本にまで染み込んでいる。

街が見えなくなってから、リチャードはゆっくりと口を開いた。彼の操縦に安心したのか、マイクもミス・ヤマダの隣に座っていた。

「マイク。わしが戦争に行った時の話をしたことはなかったな？」

「……うん」

てっぺんまで昇った太陽は強烈な日差しを海面に注ぎ、照り返し

が操縦席の窓から時折入りこんだ。リチャードはサングラスのつるを握って位置を直した。

「あら。随分古い聖書」

ミス・ヤマダが彼女の側に置いてあった聖書を見つけて手に取った。背の部分が崩れそうに古い物で、表紙にはくすんだ染みができていた。

「それはグランパがいつも大切にしている聖書だよ。美人のシスターにでももらったんじゃないの？」

そう言って笑うマイクの声など少しも気にせず、リチャードは船の進行方向を見据えたまま二人に言った。

「ちょっと長くなるが、退屈しのぎに聞いてくれるか？　勿論、ミス・ヤマダも」

二人は「うん」「はい」と同時に返事をした。それを聞いてリチャードは乾いた唇を舌の先で湿らし、数秒の間を置いて話し始めた。

カズオ・タニグチ

リチャードが生まれた南カリフォルニアは当時急速に発展していたロサンゼルス、サンディエゴ、サンフランシスコといった大都市を有し、人口の増加に伴い医療機関の充実、医師の増加が求められていた。リチャードがロマリンダ大学で医学を専攻することになったきっかけはまさに、そういった需要に応え、医師として州に貢献したいと思ったからだった。カリフォルニアは合衆国で一番大きな州だから、外国から学びに来ている学生も多かった。カズオ・タニグチも日本から留学に来ている学生だった。

丸顔でいつも眼鏡をかけているカズオは、あまり口数が多くはなかったが真面目な学生で、敬虔なクリスチャンでもあった。彼は進んだ医療技術を習得し、祖国に還元するためにアメリカに来ていた。韓国の併合、満州国の建国、急速に中国での利権を拡大している日本を、リチャードは快く思っていなかった。であるからカズオに最初会った時も、眼鏡の奥にひっそりと覗く彼の目の細さを、侮辱の気持ちでもって一瞥した。リチャードの肩ほどしかない背の高さ、長い胴と短い手足も、自らが生まれ持った血筋に優越感を抱くのに十分だった。

リチャードはポールという背の高い同級生と仲が良かった。ポールは男前で口が上手かったから、いつもガールフレンドと一緒にいた。ポールは表面上、気さくで良い男だったが、強い酒で女を酔わせていたずらをするようなこともあり、あまり素行は良くなかった。

ある日、リチャードとポールは同じ学部の女学生二人を誘って地下の酒場で酒を飲んだ。女学生の内の一人がユリコ・マツオカという日本から来ている学生で、ポールは最初から彼女に目をつけていた。「ジャップの野郎は嫌いだが、女は特別だ。どんな物が付いているか、一度確かめるのも良いだろう？」それがポールの口癖だった。リチャードは積極的に彼に加担しようとは思えなかったが、だ

からといって日本人の女に同情する気もなかった。
ここで飲む物は任せてくれと、ポールは甘くて飲みやすく、アルコール度数の高い酒ばかりを二人の女に飲ませた。どこからどうやって引っ張り出してきたのか、次から次に出てくるポールの話に二人の女学生は引き込まれ、お代わりを頼むまでの時間が目に見えて短縮された。五杯も飲むと二人の女は千鳥足になってしまい、当初の目的通りにポールはミス・マツオカの肩を抱きながら先に店を出て行った。リチャードはもう一人の決して美しいとは言えない白人女を成り行き上仕方なく連れて歩くことになった。白人女は、彼女の実家で飼っている肉牛の筋肉が逞しいことを、通行人が顔をしかめて振り返るほどの大声で延々と語り続けた。元からほんの少しも興味がなかったので、リチャードは彼女をタクシーにほとんど押し込んで家に帰し、また夜のビジーストリートを目的もなく歩いた。すれ違う男たちは何故だか軍隊に身を置いていることを、通行人が顔をしかめて多く、リチャードはその顔を見る度に唾を吐きかけてやりたい衝動にかられた。リチャードが最も嫌う職業が軍人だった。危険に身を晒しているという自己陶酔からか、軍人以外の人間の前で必要以上に横柄になる態度が気にくわなかった。
適当に目についたバーで安酒をあおり、無駄に時間を費やしていると、もうとっくに深夜だというのに何やら騒がしい声がしたのでリチャードは表の通りに出た。なんとそこには人ごみに囲まれて対峙するポールとカズオ・タニグチがいた。二人は汚い言葉を投げながら罵倒し合い、今にも格闘を始めんとしている。周りを囲むがらの悪い者たちがさかんに煽り、ほとんどの者が「やっちまえ！」とか「ジャップを殺せ！」とかポールを味方している。六フィートを優に超えるポールと五フィートと少しのカズオ・タニグチが向かい合えば、周りが応援しなくとも勝負の結果は決まりきっているように思えた。
「何故ミス・マツオカを傷つけた！」
「彼女の方から誘ってきたんだ」

「ふざけるな！　日本では結婚前の女子は貞操を守るんだ！」
「ここはアメリカだぞ！　黄色い猿が！」
カズオ・タニグチは“黄色い猿”という台詞が許せなかったのか、勢いをつけてポールの方向に踏み込んだ。ギャラリーが拳を突き上げて「やれ！」「いいぞ！」と叫ぶ。ポールが狙いを定めて右の拳を突き出す。カズオ・タニグチはポールの拳を俊敏な動作でもってかわし、拳が空を切ってのけぞったポールの懐に入ると、姿勢を低くして腰の上に器用に彼の大きな身体を乗せ、回転させて投げ飛ばした。背中から石の地面に叩きつけられたポールは、声も出せないのか顎を大きく突き出して息だけを荒く何回も吐いた。
「今度、彼女に同じことをしてみろ。二度と女を抱けないようにしてやるからな！」
カズオ・タニグチはそれだけ言い残して革靴を打ち付ける音を響かせながら去っていった。あれほど興奮していたギャラリーは体温が一度も二度も急激に下がったのか、どうでもいい捨て台詞を口々につぶやきながら散らばっていった。物静かな姿しか知らないカズオ・タニグチの、感情を沸騰させる様をリチャードはすぐにそのまま受け入れることができなかった。涼しさが多く含まれるようになった九月の夜風に、上着の半袖から出たままの肌を吹かれ続け、リチャードは身振るいを一つした。
翌日、まだ痛むのか背中を丸めながら登校したポールに会い、リチャードは昨日の顛末を聞いて驚愕と言うよりはあやうく噴き出しそうになった。
「ミス・マツオカのアパートに行って、ベッドに押し倒したら股間を思いっきり蹴り上げられたんだ。更に彼女は日本のカタナを抜こうとするんで、俺は股間を押さえながら慌ててアパートの外に出て、カズオ・タニグチにばったり会ってしまった」
「災難だなあ。お前」
「人ごとだと思って……」
リチャードとポールがそんな会話をしながらキャンパス内を歩い

ていると、向かいからカズオ・タニグチとミス・マツオカが並んで近付いてくるのに気付いた。ポールは咄嗟に身体を横に向け進行方向を変えようとしたが、リチャードは彼の太い腕をつかんで元の位置に強引に引き戻した。

「やあ。クラスメイト」

カズオ・タニグチはポールに向けて右の掌を差し出した。ポールは視点をどこに定めれば良いのか戸惑っている風だったが、リチャードが膝で軽く小突くとその掌を取った。二人はお互いの掌をつかみ、二回強く上下に振った。ポールははにかんでいるのかしかめっ面をしているのかすぐには分からない表情をしていたが、カズオ・タニグチは歯並びの良い前歯を覗かせながら明らかに笑顔と分かる顔を見せていた。リチャードはその時初めて、日本人に対し人間として接することができるような気がした。

友

ポールはカズオ・タニグチに柔道を習った。柔道は重心が低く腰から下が短い東洋人の方が上達しやすい。しかしポールは生まれ持った抜群の運動神経で地道に技を磨いていった。得意技は“ハライゴシ”だとポールは得意気だった。「マイリマシタ」「オネガイシマス」ポールが覚えた最初の日本語はこの二つだった。

リチャードとポールはカズオ・タニグチのことを“カズ”と呼ぶようになった。リチャード、ポール、ポールのガールフレンド、カズとミス・マツオカは五人で付き合うようになった。ポールのガールフレンドは度々変わったし、リチャードは余りそういった相手を作らなかったから何とも妙な集まりではあったが、少なくともポールのガールフレンド以外の四人は少しも気にしなかった。リチャードは、カズの話してくれる“ニッコウ”に強い関心を抱いた。カズは日本の“トチギケン”という地方の生まれで、ニッコウは彼の故郷に近い場所にあるという。二百七十年平安な時代を保ったその最初のサムライを祀ってあるのがニッコウだとカズは言った。寺があり、神社があり、雪を抱く山があるニッコウを、リチャードは幾度となく頭の中で描いた。国全体の歴史が百五十年を少し超したばかりのアメリカに生まれたリチャードは、たった一つの時代が二百七十年もある日本という国家に対し、抽象的な魅力を感じたがそれを言葉で表現することはできなかった。リチャードは必ずニッコウに行くことを決めた。サムライの霊に手を合わせることで、抽象的だった魅力が具体的になる気がしたからだ。

カズとミス・マツオカが結婚したのは、リチャード達がカリフォルニア州の医師になって三年後のことだった。一九三七年の日中戦争勃発で日本は世界的に中国侵略を非難され、一九三九年初頭には日米通商航海条約が失効した。しかしリチャードは自分達だけが日米間の軋轢とは無縁の場所にいる気がしていた。戦争がすぐそこま

で忍び寄ってきているようには少しも思えなかった。
カズとミス・マツオカの結婚パーティーは派手ではなかったが、二人を祝う友人の多さはカズとミス・マツオカの人柄を物語っていて、リチャードにとってもポールにとっても忘れられない一夜になった。普段は酒に対して自制できるリチャードは、飲むピッチを上げ過ぎ、酔いを覚ますためにパーティー会場の外で夜風に当たっていた。
「ディック。随分飲んだな？」
リチャードは友人の間でディックと呼ばれていた。
「ヘイ。カズ。はしゃぎ過ぎたよ」
目の前に人が見えているのに、その話している声が良く聞こえない体験は初めてだった。普段は余り飲まないウォッカを五杯も飲んだせいだと、うつろな脳でもってリチャードは思考した。
「来年、日本に帰ろうと思う」
カズが言った短めの一言が、現実の物なのか夢なのか、アルコールに程良く犯されたリチャードはすぐに判別できなかった。カズはリチャードの反応を待っているように、人通りが減ったウィークエンドのビジーストリートに敷かれた石畳を見つめていたが、おもむろに続けた。
「子供が大きくなるまでは、日本で育てたい。そしてまたアメリカに戻ってくるよ」
ミス・マツオカのお腹には、来年生まれてくる二人の子供がまだほんの小さい姿で生きていた。
「ニッコウを、案内してくれ」
「勿論。いいよ」
「俺は“アリガトウゴザイマス”と“ゴメンナサイ”しか言えない。君がいなかったら日本で迷子になってしまう」
「ああ。日光は秋か冬がいい。橙や赤に色づいた山々は美しいし、雪で白く染まった姿もまた良い」
リチャードがうんうんと大げさにうなずいていると、夜空を見上げ

ていたカズが言った。
「見てみろよ。流れ星だ」
「え？」
「ほら。ああ、見えなくなった」
「どこだ？　星なんて出ているか？」
「飲み過ぎだぞ」
カズの言葉に応えるようにリチャードは、決して大きくはないが筋骨がたくましいカズの肩に腕をまわし、普段より高い声を出して笑った。酒臭い息にカズは多少腰を引く素振りを見せたが、しかしすぐに返答の代わりにリチャードの腰を腕で叩いた。
ポールに最初に伝えたら大騒ぎされると思ったのだろう。帰国することをカズが最初に自分に伝えた理由がリチャードには分かっていた。学生の頃に比べれば不定期ではあるが、ポールは相変わらずカズを師範として柔道を習っていた。
カズが日本に帰ってしまうことを知ると、ポールは気の毒になるくらい狼狽した。リチャードが間に入っても少しも効果がなく、ポールは大きな身体を揺すって泣き始めてしまった。ミス・マツオカ――カズのワイフになったのだからミセス・タニグチ、もしくはユリコが正しいが――はもらい泣きをし、カズは何かを堪えているのか、薄い唇を固く横一文字に閉じて微動だにしなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8577z/

流れ星

2011年12月29日00時53分発行